

【シンポジウム】第3回国際学術会議「マンガの社会性—経済主義を超えて—」8

マンガに学び得るもの—「はだしのゲン」を例に—

吉村和真（京都精華大学）

おはようございます。京都精華大学の吉村です。本日最初の発表ということで、朝早くからお集まりいただきありがとうございます。発表時間が限られていますので、さっそく本題に入りたいと思います。

私のテーマは「マンガに学び得るもの」ですが、それはいったい何を意味するでしょう。これではあまりに漠然としていますので、今回の学術会議の全体テーマである「マンガの社会性」に引きつける形で、「読者がマンガから学んだことは、どのように社会に役立ち得るのか」と言い直しましょう。

そのための素材として、中沢啓治「はだしのゲン」を取り上げます。周知の通り、この作品は広島に投下された原子爆弾の猛威と残酷さ、そして愚かな戦争を引き起こした人間への怒りを主題に描いたものです。作者が当の被爆者であることも広く知られています。

では、なぜこの「はだしのゲン」を取り上げるのか。すでにお気づきかもしれませんが、それは、今年3月11日の東日本大震災の際に生じた福島原子力発電所の事故によって突き付けられた、原発に対する日本社会の危機管理意識の低さとマンガとの影響関係について考えてみたいからです。先ほどの言い方になぞらえれば、「原爆の恐ろしさを克明に描いた「はだしのゲン」というマンガは、日本人の原発に対する意識にどのような影響力を持ち得ていたのか」、あるいはもっと踏み込んで、「原爆による放射能の脅威を描いた「はだしのゲン」を多くの人々が読みながら、なぜ日本では原発政策に対する目立った批判的世論が形成されなかったのか」という問いになるでしょう。

結論から言えば、もちろんこれは仮説に過ぎませんが、その問いを丸々反転させる形で、「はだしのゲン」が優れて特異な「原爆マンガの正典」であったがゆえに、かえって原発問題とは直結しなかったのではないかと私は考えています。

ただ、そもそもたった一つのマンガに社会的影響力を求めると自体無理があるように思われるかもしれません。しかし、およそ1970年代後半以降の日本において、「原爆」と言えば「はだしのゲン」と多くの人々が連想できるほど、国民的マンガの一つとして定着しています。ただし、そのような状況に至るには、単に内容が素晴らしいとか発行部数が多いということとは別の理由が存在します（ちなみに「はだしのゲン」の累計発行部数は、文庫版や愛蔵版を合わせて約1000万部とされています）。

以下、その「はだしのゲン」の社会的影響力の大きさを考察するうえで見逃せない点を三つ指摘したいと思います。それらはいずれも、この作品が日本社会で「原爆マンガの正典」として機能するための要点であるとともに、「マンガに学び得るもの」が何に起因し、または何に制約されているのかについてのヒントを与えてくれるでしょう。

第一に、人類史上初の原爆投下という悲惨な出来事を、当の被爆者がマンガに描いた点です。極めて当然のことですが、これはやはり外せません。しかしそれは、単に当事者である立場を強調しているのではなく、それを独自のマンガ表現や世界観に仕上げたマンガ家としての力量を踏まえてのことです。

ご覧のように、「はだしのゲン」には、目を覆いたくなるほどグロテスクな被爆者たちが

登場します。特に注目したいのは被爆者たちの目です。一般的にマンガの登場人物の目はその人の気持ちや感情を表現しますが、それを真っ黒にすることですでにその人が生気を失っていること、つまり間もなく死んでしまうことを示唆します。このような被爆者を私はかつて「黒い目の被爆者」¹と名付けて考察しましたが、被爆者の凄惨な姿を目の当たりにした中沢さんならではの表現と言えるでしょう。

原爆そして戦争の惨禍を語り継ぐという課題は、戦争体験者が着実に老化を辿る現在、大きな社会的関心事となっています。その一つのツールとして、若者世代に影響力を持つマンガやアニメに着目する論調も増えていますが、被爆者である作者の怒りが強く込められた「はだしのゲン」は、今でも抜群の存在感を保持しています。現に、今回の原発事故に際しても、中沢さんの言動はしばしば大きく報道されました。

続いて第二に、「はだしのゲン」が少年マンガとして出発しながら、その後、掲載媒体を大人向けの論評誌に移した点です。

「はだしのゲン」は、1973年に『週刊少年ジャンプ』で連載開始しました。そのため、単なる反戦反核マンガではなく、主人公がたくましく成長する姿を描いた「少年マンガ」の要素を内包しています。原爆投下直後の悲惨な場面の印象が強くありますが、周囲からのいじめや差別に立ち向かうゲンには、被爆者という立場だけでなく、一人の少年としての強さや正義感が見受けられます。

ところが1975年以降、掲載媒体を『市民』、『文化評論』、『教育評論』といった左派系の評論誌や教育誌に移して以降、戦争責任を巡るかなり政治的な主張が強くなります。これは子供が読むマンガとしては稀なことです。つまり「はだしのゲン」は、少年マンガの型を持って子供たちに受容されつつ、同時に大人の主張を持ったマンガだったのです。

しかし実は、そうした政治的主張が強い場面ほど、読者にはあまり記憶されない環境も一方でできあがっていました。実のところ、それは、「はだしのゲン」がその他のマンガと異なる第三の点となる、この作品の単行本が平和教材として活用されてきた事実と関係しています。

近年、マンガは海外でも評価され、教育現場に導入される例も増えてきましたが、それ以前は長らく「勉強の敵」と見なされてきました。したがって、学校にマンガを持ち込むのは一般的に禁止でした。ところが、1975年に刊行された「はだしのゲン」の単行本は、複数の教育団体や教師を通じて、平和教材として学校図書館や学級文庫に置かれました。その結果、この作品は子供たちにとって学校で堂々と読める貴重なマンガとなったのです。

ただ、そのために、普通とは変わった読まれ方をすることになりました。例えば通常、図書館に配架される本はワンセットであり、読み手が多い場合、最初から最後まで「順番通り」に読み終える子供の数は限られてしまいます。そのことは、物語の展開、すなわち作者の意図通りには「はだしのゲン」が読まれなかった可能性があることを意味します。実際、先に見たようなグロテスクな被爆者の姿も影響して、「はだしのゲン」を恐怖マンガと受け止める子供も少なからずいました。また、この作品はアニメや実写版の映画としても平和教材になりましたが、それらのクライマックスは被爆シーンであり、確固たる政治的主張を持つ中学時代のゲンの姿は後景に退くことになります。

その結果、被爆に対しては感覚的な「恐怖」や「気持ち悪さ」を覚えながら、原爆投下に至る戦争の経緯やその背景にある世界情勢にまで目を向ける子供がどれほど存在したかを考えるとき、原爆マンガとしての「はだしのゲン」の影響力は、多分に生理的かつ個人

¹ 吉村和真 「『はだしのゲン』のインパクト—マンガの残酷描写をめぐる表現史的一考察—」吉村和真・福間良明『「はだしのゲン」がいた風景』、梓出版社、2006、pp. 246-293.

的なレベルに傾き、論理的かつ社会的なレベルではなかなか浸透しなかったのではないかと推察されるのです。

しかし、それは決してこの作品の質を落とすものではありません。むしろ、中沢さんも「原爆の残酷な場面を見て、「怖いっ!」「気持ちが悪いつ!」「二度と見たくないっ!」と言って泣く子が、日本中に増えてくれたら本当によいことだと私は願っている」² と述べられるように、そのような生理的嫌悪感を読者に植え付けることを大きな目的としていました。

以上の少なくとも三点をあわせ持つことで、「はだしのゲン」は「原爆マンガの正典」としてのポジションを構築したと私は考えますが、今回は要点の指摘に留めます。詳しくは吉村和真・福間良明編著『「はだしのゲン」がいた風景—マンガ・戦争・記憶—』（梓出版社、2006年）をご参照いただければ幸いです。

話を戻しますと、それゆえに「はだしのゲン」から読者が学んだはずの、原爆による放射能の脅威と原発問題は直結しなかったと私は考えるわけですが、さらに補足するならば、「はだしのゲン」が描き得なかったもの」にも目を向ける必要があります。

「はだしのゲン」は1987年に連載を終え、第二部も構想されましたが、2009年に中沢さんは目の病気などの理由から再開を断念しました。その結果、ゲンが東京に出てからの時間となる、1953年の秋以降については描かれることはありませんでした。つまり、日本の原発政策が地方に展開する、1970年代以降の社会状況はまったく登場しないわけです。

毎年8月6日に広島市で平和記念式典が開催されています。中沢さんはこれまで意図的に出席されませんでした。今年初めて参加されました。その理由を、ガンが再発し「これが見納めになるかもしれない」と思ったため、そして、福島原発事故の対応について首相の声を直に聞いたかったため、と語られています。また、『ビジネスジャンプ』が企画した震災に対するマンガ家からの提言コーナーでも、第一回目に中沢さんのコメントが掲載されています。中沢さんは「広島と長崎の教訓が生かされていない」、「人間が制御できない原発は存在させてはいけない」と主張されています。仮定の話ですが、「はだしのゲン」の続編が描かれていたならば、まちがいなく大人になったゲンは原発政策に反対を唱えていたでしょう。

では今後、どうすれば、例えば原発問題を考えるうえで、「はだしのゲン」から学び得たことを社会的教訓にできるのでしょうか。そのためのヒントをさしあたり二つ提起して、この発表を締めくくりたいと思います。

一つは、「はだしのゲン」には長らく比較対象となる原爆マンガがありませんでしたが、近年それが変化してきた点に留意することです。代表的には、こうの史代「夕風の街 桜の国」（2004年）や西岡由香「夏の残像—ナガサキの8月9日」（2008年）など、戦無世代による作品が挙げられます。そこには、被爆体験を声高にできない当事者や被爆二世・三世の存在、広島ではなく長崎の被爆状況、在日朝鮮人被爆者の境遇、原爆投下した側であるアメリカ人の葛藤など、「はだしのゲン」が描き得なかったもの」が複数登場します（ちなみに西岡は、福島原発事故を受け、自身のホームページで「放射能Q&A」を掲載するなど、「原爆マンガの作者」を自覚した対応を進めています）。

「はだしのゲン」は今こそ、「孤高の正典」から「オルタナティブな原爆マンガ」へと変化することで、より開かれた〈読み〉を提示する可能性を持っているのです。

もう一つは、原発そのものをテーマにしたマンガとの架橋です。当然そこには、今回の大震災をきっかけに発表された諸作品も含まれますが、ここで特に言及しておきたいのは、

² 中沢啓治『「はだしのゲン」自伝』教育史料出版会、1994年、p.211

すでに 20 年前に原発事故の恐ろしさを訴えながら、「はだしのゲン」に比べればほとんど社会的影響力を持ち得なかったマンガのことです。それは、三枝義浩「チェルノブイリの少年たち」という作品です。

これは 1991 年の『週刊少年マガジン』に二回読み切りで掲載されました。題名の通り、1986 年に発生したチェルノブイリ原子力発電所の事故がもたらした、ある家族と被災地域住民たちの悲劇、そして、原発事故を隠蔽する権力の暴力性を描いた作品です。作者の三枝さんは、戦争ものやエイズ問題など社会派の作風で知られていますが、何気なく読んだ同名のドキュメント・ノベルに触発され、チェルノブイリ原発事故の恐怖と悲惨さを世間に知らせるべく執筆されました。

掲載当時の『週刊少年マガジン』は約 300 万部の発行部数を誇っており、読者の反響はそれ相応にあったと推察されますが、今やこの作品の存在はほとんど忘れられています。もちろん、福島原発事故に直面した今こそ再び注目される可能性もあるでしょう。実際、日本で原発事故が起きるなら地震だろうとの的確な解説も含め、その先見性やメッセージの切実さは読む者の胸を打ちます。

しかし、私たちにとって重要なのは、忘れられた作品を掘り起こすだけでなく、「はだしのゲン」をはじめとする原爆マンガに比べ、なぜ、あるいは、いかにして、原発マンガが忘れられてきたのかを問うことでしょう。同時に、その問いは、両方のジャンルを連結させる想像力を狭めてしまった私たちの在り方にも向けられるはずです。ちなみに、「チェルノブイリの少年たち」では、この原発事故によってまき散らされた放射性物質が広島に投下された原爆の千数百倍ともいわれていると、その想像を絶する規模を警告しています。

以上のように、「マンガに学び得ること」とは、私たちの想像以上に大きな社会的影響力を持つケースもあれば、私たちの想像力を無批判的に制御してしまうケースもあります。大震災という歴史的イベントがなければ、「はだしのゲン」の影響力が原発批判の世論形成にまでおよばなかった現実や、日本における原爆マンガと原発マンガのすれ違いは、これほど露わにならなかつたかもしれない、それに気づくこと自体が大切なのです。

言い換えれば、「マンガに学び得るもの」の探究とは、「マンガ研究に学び得るもの」の発見であり、とりもなおさずそれは、私たちマンガ研究者にとっての共通テーマとなるのです。

例えば、私の次の発表でもふれられるように、韓国では学習マンガの人気の高いことが知られていますが、かりに日本で「はだしのゲン」と同じく「チェルノブイリの少年たち」が学習マンガとして学校図書館に置かれていたならば、原発問題について今頃どのような道が開かれていたことでしょう。あるいは、日韓両国の歴史認識などの諸問題に対して、マンガの社会貢献度を高めようとするれば、両国のマンガミュージアムの資料環境や研究者同士の連携にはいったい何が求められるでしょうか。

そうした将来に向けた想像力の広がり、今回の発表が少しでも役立っていることを願いつつ、私の話を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

(了)